

佐伯地方の姓氏 (五)

染矢・吉田

佐脇貫一

(会員・佐伯市長良)

染矢氏は佐伯地方特有の苗字

染矢氏(第九位)は佐伯地方特有の苗字といつてよい。いまその分布の概略を見ると、佐伯市部には約百九十戸あるが、下堅田地区にもっとも多く、鶴岡・八幡地区がこれに次いでいる。郡部町村では弥生町が多く、鶴見町・本匠村・直川村の順で次ぎ、一戸もないという町村はない。隣接市部では津久見市と大野郡野津町に多少あり、大野郡三重町には染屋、同郡緒方町には染谷があつて、ともに染矢に通じている。

苗字の多くが地名から起つていふという通説を破つて、染矢といふのはどうも地名ではないらしい。ただいえるのは染矢が染谷あるいは染屋に通じていることで、染谷は茨城県の地名(後述)にあり。染屋は郷村名にはない

が大野郡をはじめ各地の小字名にある。(染物業のあつたところ、若しくは染屋形のあつたところ)

次に佐伯地方にある「矢」の字が下につく苗字をあげてみよう。青矢(上浦町津井)・岩矢(蒲江町高山)・角矢(大入島)・国矢・染矢・土矢(本匠村宇津々)・坪矢(米水津村色利)・遠矢・中矢・仲矢・藤矢(木立)・古矢(鶴見町吹)・巻矢(木立)・本矢(木立)・森矢・山矢・栗矢(蒲江町)・浜矢(蒲江町畑野浦)・谷矢(上浦町津井)・品矢(本匠村波寄)・大矢(弥生町上小倉・榊牟礼)・神矢(弥生町祇園)・鍵矢(米水津村色利)・松矢(同村)以上二十四姓。

このうち岩矢(岩谷・岩屋)・染矢(染谷・染屋)・土矢(土谷・土屋)・坪矢(坪谷)・中矢(中谷)・仲矢(仲谷)・古矢(古谷)・浜矢(浜谷)・大矢(大屋)

・神矢（神谷）などは「谷」または「屋」を同訓で使っている。（谷はタニと読んでいる場合もある）

以上は佐伯地方にある「矢」の字が下についている苗字であるが、「矢」の字が上につく苗字はどうであろう。

矢野氏が佐伯地方の苗字ベスト一〇の第四位を占めたことは前述した。そのほかでは矢石・矢川・矢田・矢倉・矢富・矢鉾はこ・矢部など諸氏があるが、いずれもとくに多いという苗字ではなく、多いもので数戸にすぎない。

それでは何故、苗字に「矢」の字が用いられるのであろう。もちろん私たちの祖先は戦場や狩猟に「弓矢」を用い、弓を作るために弓削部ゆげ、矢を作るために矢作部やせをもっていた。こうした職業部の所在が地名となり、また居住する土地（山や川）の形状が弓弦や矢羽の形に似ているため地名になった場合もある。そしてこれらの地名が苗字の起りになったことは、これまで述べてきたとおりである。

さて、本題にかえて染矢氏について考えよう。染矢氏が染谷あるいは染屋氏に通じるとすれば、『姓氏家系辞書』にある染屋氏と同族ということになる。この染屋氏は常陸国新治郡染谷郷から起った大織冠藤原鎌足の玄

孫、太郎大夫時忠の後であるという。時忠は相模国大住郡三宮（神奈川県伊勢原町）の比々多神社の祭神で「鎌倉鎮将太夫時忠之靈」として祭祀される、この地方の地主神である。なお染屋氏は磐城・岩代地方（福島県）に多い。

大分県史料志手文書にある大友義鎮家中の三種の家臣団、御紋衆（大友一族六十二家）・国衆（緒方一族三十七家）・新参衆ニお下り衆（諸氏百五十家）のなかには染矢氏はない。しかし、佐伯氏家中には惟治家臣に染矢内記・染矢新助があり、惟教の従士に染矢内記・染矢新十郎・染矢平次郎がある。（榎牟礼実録から）つまり染矢氏は大友氏の直臣ではなく、佐伯氏の世臣である。

もっとも鶴見町吹浦の染矢氏は、伝承によると大友氏遺臣のようで、染矢氏一族だけで代々「大友神社」とよばれる小祠を、故主の廟として祀っている。

毛利藩政時代になると佐伯氏の世臣であった染矢氏は野に下り、下野村の土豪になったが、高政はこれに下野村大庄屋を命じた。またその一族は下野村・堅田村・上野村・戸穴村などそれぞれ帰農した土地に居住した。

染矢内記の直系という下野村大庄屋染矢氏は治右衛門

時儔ときらひとが藩祖高政に召出され、鉄砲方となつていわれる伊勢殿流（御流儀という）の鉄砲を習得した。

佐伯藩六代周防守高慶は、元禄という時代に影響されて、とかく文弱に流れようとする藩内の氣風を刷新するため、尚武の心得を説き、武技を奨励したが、正徳五年（一七一五）十二月、下野村大庄屋染矢治左衛門時宜よしただ一人、養賢公御流儀（伊勢殿流）の鉄砲術を伝えてその技に精進していることを知り、これを賞して白銀五十兩を賜り、毎年頭に登城して年賀の礼を言上する資格を与えた。また時宜に命じて藩の子弟に鉄砲の教授をさせたので、その門弟中に技術の濫奥らんおくを極める者が出た。徒士下川丹右衛門、目付格松本重昌、益田金兵衛組下の足輕有右衛門、西名兵右衛門（勝行）組下の足輕万右衛門の四人はもっとも技法が優れたため、俗に四天王といわれた。

佐伯藩の鉄砲については、享保十四年（一七二九）高慶の時代）仙台藩伊達家より問合せがあり、佐伯藩では小林典膳（晴胤）と黒木常右衛門（実応）に命じて返答させた。その文書のなかに次のような箇条がある。

一、（御流儀は）伊勢殿流と唱へ申し候。御家にては

御流儀と唯今にも申し候。

一、紹元様（高政の法名）御代、御家中の面々御流儀残らず稽古仕り候ほか、浪人内田権右衛門、崎山忠左衛門などと申す者、殊のほか御流儀に精出し、御心にも叶ひ候故、御相伝遊ばされ候一件の聞書を写し所持仕り候。（後略）

毛利高政は津田流の鉄砲の名手だった（鶴藩略史）公性たくや卓犖たくや雄偉にして、少にして津田監物に就て砲を学び、特に其秘訣けつを極め、出藍しんの称あり。）

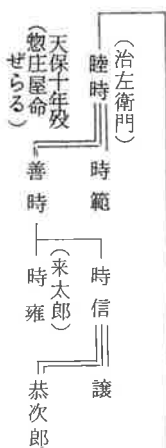
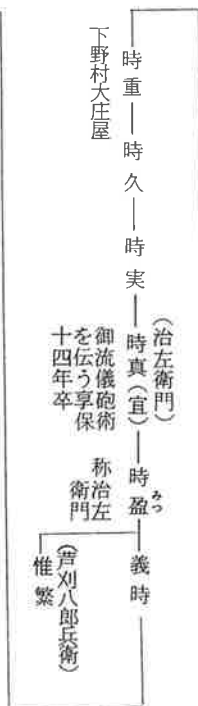
〔註〕津田監物は織田信長の家臣、津田流砲術の流祖。

高政はつねに修練を怠らず、火薬の調査も自ら行なつたという。家士にも高政に就て学ぶ者が多かつたが、なかでも西名勝信（兵部）・長谷川元清（与左衛門）・坂本永慶（瀬兵衛）が優れ、その秘訣を受けた。また領内に居住する浪人、土豪の中で、鉄砲上手の者をあつめ、修練の相手にした。内田権右衛門（奥藩高橋家浪人）、染矢治右衛門（佐伯氏旧臣）などである。

五代高久（駿河守）の家臣小林九左衛門（吉晴）は經濟に通じ、つとに水田開拓計画を策していたが、元禄四年（一六九一）三月、藩主の許可を得て自ら奉行となり、

〔染矢氏系図〕

〔大織冠鎌足公二十七代後胤・正四位上左中將隆定、十三代ノ孫〕



上野村小田の井堰を築造、上野村小田より上岡・古市を経て下野村境にいたる水路を開鑿した。それより三年余、ようやく十分なる通水を見るようになり、上岡・古市・下野三村の低田百五十七町歩を灌漑することができた。このとき九左衛門がもっとも信頼して、水路開鑿事業一切の相談をしたのが、下野村大庄屋染矢治左衛門時真(時宜か?)といわれ、小田井路の完成は時真とその孫睦時の二代の功と讃えられている。享保・元文のころは、しばしば番匠川の氾濫があり、小田水路はその度に災害を受けた。竣工後百三十余年を経た文政年間には大修理を要するようになったので、大庄屋染矢治左衛門(睦時)は関係各村役人とはかって大修理を計画、直ちに実施した。すなわち横堰を改造、支線を縦横に開通して灌漑をよくしたため、受益水田は二百町歩に達した。時の藩主出雲守高翰(十代)は睦時の功を賞し、惣庄屋を命じ、三人扶

持を賜った。

さて、染矢氏（高畑染矢氏）は系図によると、大織冠藤原鎌足二十七代の後胤、正四位上左中将隆定（実在の人物としては参議四条隆久の子隆定がある）十三代の孫藤原貞助を元祖とし、貞助の子貞頼は建久七年、大友能直に従って豊後に下向。貞頼十一代の孫時忠（染矢内記）は佐伯惟治に仕えたが、大永七年十一月、日州尾高知山で主に殉じて自害した。その子が惟教宗天の家中にあった内記時英、後五郎左衛門尉と改め佐伯惟定に仕えた。

この系図を論じても仕方がないが、鎌足から二十七代の後胤という、これを世・代のいづれにとるにしても藤原隆定は南北朝時代の人物に相当し、その十三代の孫という藤原貞助は室町後期の人物となる。ところが系図では貞助（元祖）の子貞頼が鎌倉時代前期の人物であり、貞助から十三代目の内記時忠は室町後期（戦国時代）の人である。

しかし、染矢氏の伝承が藤原氏裔であることは確実であるから、系図にある家祖「隆定」は調べて見る必要がある。尊卑文脈によると、藤原北家魚名流四条家一門に隆定は二人あり、一つは嫡流正二位大納言四条隆資の次

子従四位上左少将隆定で、他の一つは支流大官家の従二位参議隆久の次子無官隆定である。左少将隆定は大塔宮護良親王の侍臣で、宮に従い吉野で討死している。参議左中将隆久の子隆定は北朝方であったことと、後改名して隆茂と称したことはわかっているが、何処で終った人かわからない。この一統の家紋は「四ツ片喰」。

佐伯市内でもっとも染矢姓の多いのは堅田・青山地区で、市外では弥生町上野地区である。これらの染矢氏の伝統はまちまちだが、佐伯氏旧臣の後、つまり佐伯氏の遺臣であるという伝承はどの家も変らない。また染矢氏の家紋は各家で違い、市内では「鷹の羽」「木瓜」「単梅」「かたばみ」などを見受け、堅田地区に「桔梗清松、鷹の羽染矢」という伝承があることも聞いているが、部落に天満社があるところでは「丸に梅鉢」が使われており、一族共通の定紋を知ることができない。

なお下野村大庄屋（惣庄屋）であった名門染矢氏からは明治十二年、南海部郡選出の第一回県会議員として、睦時の直系染矢譲が当選し、譲の弟恭次郎は同族喜蔵の養子になったが、明治四十四年旧鶴岡村長となり、昭和四年四月まで五期十八年在任した名物村長であった。

どこにもある吉田の地名と苗字

私が集計したベスト一〇の最後は吉田氏である。この吉田氏は全国的な大姓で、各地の荘・郷・村・苑等の名称（地名）がその起原になっている。

さて、吉田氏の吉田（よしだ）は地名からきたものではないが、古代は吉田（きちだ）と読んだ。第五代孝



四つ片喰



違い鷹の羽



丸に九枚笹

昭天皇から出たという大春日氏族が

吉田連（きちだのむらじ）の先祖であるが、塩乗津彦命のとき百済国に使用して、そのまま同国にとどまり、

数代を経て聖武天皇の時代（七二四

一七四九）、吉連大尚・少尚の兄弟

が巫医学を学んで帰国したと伝える。

吉連は吉田連と同姓氏である。なお

吉田連宮麻呂は嵯峨天皇の弘仁二年

（八一）吉田宿弥の姓を賜った。

その頃から吉田が良田（よしだ）

の同義とされ、吉田（よしだ）と訓

まれるようになった。平安初期から

中期にかけて、全国各地に吉田荘や良田荘または吉田保が設置され、信濃国には吉田牧が設けられた。

荘園・保・牧・藪・厨などはいずれも国、社寺、貴族（公家）の公領あるいは私領であるが、平安中期以後は朝廷の紀綱がゆるんだため、勃興した武家に押領されて、領家とは名ばかり、下司とよばれる在地豪族、名主・地頭などの新興勢力に実権を握られ、やがて武家政権の時代を招来するようになった。

吉田荘は全国にだいたい十四か所（讃岐は良田荘）あったが、これらの荘園からは必ずといってよいほど吉田氏が起っている。九州では筑後・肥前・日向・豊前に吉田田荘があり。（豊前には仲津郡に吉田荘、企救郡に吉田保）また大隅に吉田院があった。

このほかに吉田の地名（郷邑）は数か所（筑前三か所・肥前三か所・肥後二か所・豊後二か所）あるが、豊後の二か所は直入郡の吉田郷（入田荘）、大野郡三重郷の吉田邑（野津町）である。また佐伯地方の吉田姓を考慮に入れると、伊豫地の吉田が気になるが、伊豫には北宇和郡吉田町と松山市吉田（旧温泉郡）があり、海（豊後水道）一つ隔てた対岸である。

吉田姓にはピンからキリまである。というのは公家社会の吉田家から武家の吉田氏、神職筆頭の吉田氏（卜部氏）から相模司家の吉田氏など特殊階層の姓氏もあれば、一般士民階層の吉田氏になると、各家各様の伝承をもつ地域社会の名望家もある。

藤原北家勸修寺流吉田家は勸修寺光房の子権大納言經房を始祖とする。後醍醐天皇の側近として笠置落ちのお供をした藤房・季房兄弟は万里小路の吉田宣房の子である。神祇官の卜部氏は中臣姓、京洛吉田に鎮まる吉田神社祠官であったため吉田氏を称した。吉田兼熙の玄孫兼俱は唯一神道を創めて神道の名家となり、神祇伯白川王家に次ぐ副神祇伯として、全国の神職を支配した。徒然草を著した吉田兼好（兼好法師）は卜部兼茂の子兼名の孫である。

武家の吉田氏はずいぶん多い。著名なものには甲斐（山梨県）に清和源氏武田氏族が二家。信濃（長野県）に清和源氏村上氏族・同武田氏族大井氏流・同小笠原氏族・藤原北家利仁流齊藤氏庶族など。三河（愛知県）に清和源氏足利氏族。常陸（茨城県）に桓武平氏大塚氏族。相模（神奈川県）に秀郷流藤原氏大友氏族。武蔵（埼玉県）

に有道氏族児玉党。近江（滋賀県）に倭漢氏族丹波氏流。出雲（島根県）に宇多源氏佐々木氏流。伊豫（愛媛県）に越智氏族新居氏流などがある。

清和源氏武田氏族の吉田氏は武田太郎信義の子左兵衛尉有義の子吉田太郎有信を祖とするものと、有義の弟武田五郎信光の子太郎朝信の曾孫成春（吉田性光入道）にであるものがある。また武田一族で信濃佐久郡大井荘にあった大井信頼の後信常は筑摩郡吉田に住み吉田氏を称した。信濃に発祥する清和源氏村上氏族の吉田氏は家祖源頼清の孫村上山城守清宗の弟季信の子吉田冠者宗季にでている。このほか清和源氏には義康流足利氏族の吉田氏がある。これは足利義氏の次男尾張守家氏（斯波氏）の庶子広沢太郎義利の子で、三河吉田に住んだ吉田三郎義博を祖とする。

佐々木氏流吉田氏は佐々木秀義の末子右馬助嚴秀の子泰秀が近江吉田に住み吉田四郎と号したことに始まる。また泰秀の子秀信は出雲能義郡吉田に移り、その子孫は出雲吉田氏を称した。

次に大友氏族吉田氏は大友能直を出した近藤氏流で、嶋田権守景親の子吉田小八郎景重に始まるものと、景重

の弟近藤武者所景頼の子武藤頼平の孫吉田次郎資時に始まるものとある。

九州各地の吉田氏が、すべてその近接地域の吉田（莊・保・郷・村）から発祥したとは考えられないが、しかし、祖先たちのある者は、いつの時代かその土地に住んでいたといえるのではなからうか。少貳氏や大友氏が北部九州の実権を握ったのは、だいたい鎌倉中期からであるが、大宰府を核とする筑肥の間には古くからの豪族が蟠居していた。原田・秋月の一族、菊池・高木・草野の一族、いづれも大宰府官人の末で、前者ははっきりした大蔵氏族。後者は藤原氏を称してはいるが在地豪族で、筑紫国造（つくしのみくにのみよ）の後裔であろうといわれている。

鎮西要略の高木系図によると、中関白藤原道隆の子文家が肥前高木氏の始祖である。文家の孫文貞あたりから高木氏を称したらしく、文貞の次男頭貞は上妻氏を称し、頭貞の裔上妻下総守（高木家秀）の長男家宗は上妻次郎大夫、次男家基は吉田三郎と称して筑後吉田氏の祖になった。なお前述した武藤頼平の末子宗平は兄資頼（大宰少貳）に従って九州に下り、その子資時（吉田次郎）・景村（吉田小次郎）は肥前藤津郡吉田荘にあったといわ

れ、戦国時代ここに吉田城（嬉野町）があり、城主吉田某がこれを守ったという。このほか肥前吉田氏には北松浦郡吉井郷吉田免を領した下松浦党の一族吉田氏がある。豊前吉田氏は企救郡吉田保に起るもので、長野豊前守直盛の後といわれる。その裔という保常陸介隆康は大内氏に属したが、後毛利氏に降り永禄六年、大友宗麟が豊前に入り毛利氏と交戦するや、門司城を守って大友軍に抗した。この隆康は吉田小次郎とも称し、祖父は長野三郎左衛門（南原高城々主）という。隆康の末子吉田庄右衛門盛佑は毛利宍岐守吉成に仕えた。

それでは豊後の吉田氏は何処から起ったのであろう。直入郡吉田郷か、大野郡三重郷の吉田か、しかし、この地域に小豪族吉田氏が起ったという伝承はない。大友氏の庶流臼杵氏（水ヶ城主）家臣だった吉田一祐は豪勇無双の武人で、大友氏滅亡後栗山の砦（臼杵市江無田）に籠り、新領主太田飛彈守一吉に反抗した。一吉は家老高橋六右衛門に討手を命じ、栗山を包囲強攻して一祐とその党類六十余人を殲滅したという。臼杵市地域には吉田姓が多いが、若しかしたら一祐の子孫が残っているのかも知れない。

佐伯地方の吉田姓となると、その範囲がまた狭められる。伊豫から蒲江浦に流亡してきた河野通安に従って移入した人々の中に吉田氏がある。さしずめこの吉田氏は越智氏族新居氏流で、おそらく宇和郡吉田か、温泉郡吉田に起った氏であろう。

佐伯市内の吉田姓は海崎地区百枝に多い。この吉田氏が何処から起ったか詳らかでないが、すでに慶長年間に吉田氏を名乗る一族が住んでいたことは確である。佐伯藩祖毛利高政の愛妾で、次男数馬高明の生母である吉田氏は、この百枝の吉田家の出身である。また高政に従って朝鮮の役に参戦、南原城の攻略に手柄をたてた侍の名が、戸倉行重（織部）の首帳控に残っているが、その中に吉田五右衛門がある。おそらく高政が日田在城当時扶持した者であろう。佐伯藩の家中席帳には中小姓吉田理左衛門ほか四名の吉田氏が載っている。このほか足軽組、城下の町家にも吉田氏はあるが、その苗字の起因となるとなかなか判明しない。

ところで吉田氏の家紋であるが、清和源氏系は「抱茗荷」「丸に蕨」「四菱」「丸に二引両」など、宇多源氏佐々木氏流は「四ツ目結」「丸に地紙」など、藤原氏系

は「藤の丸」「丸に九枚笹」「三ツ柏」「丸に一山」など、丹波氏族系は「向う梅」、卜部氏族は「桔梗」を用いている。

(つづく)

連載記事「城山」について

先に「蒲江の漁具」について三十六回にわたる連載記事が、大分合同新聞「県南・豊肥」の頁を飾ったことは御存知のとおりです。現在「くらしの今昔」と題して、臼杵民俗資料の記事が連載されていますが、まもなく終るといふことです。

その後をうけて「城山」についての記事が連載されることになっています。

城山の地質・動植物・歴史・独歩など全般にわたって、佐伯史談会員のその道の第一人者が執筆しています。城山についての研究では、これ以上総合的にまとまったものはないと思います。

この号がお手許に届く頃には、すでに連載が始まっていると思います。ご愛読を願います。(塩月)